

福岡城・鴻臚館を活かした観光都市戦略事業について

福岡城・鴻臚館を活かした観光都市戦略事業実行委員会

(1) 共働のきっかけ・必要性

● 「共働」の必要性

以下の課題を解決するためには、市民目線・発想、民間マインドの事業運営、幅広い参加とコンセンサスが必要であるが、NPO単独では実現困難であるとともに、官民の共働という手法によって、効果的な事業が実施できる。

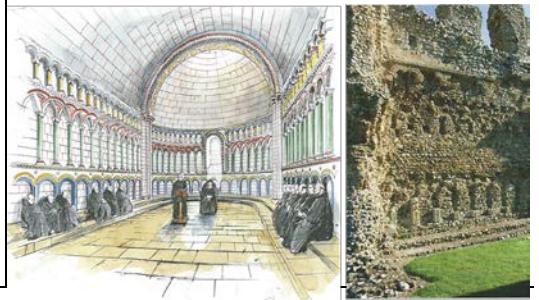
● 事業提案の理由

NPO10年間の活動経験から、次のような課題が顕在化した。①市民目線の案内表示がなく回遊しにくい空間、②市民が誇りに思うランドマークになっていない、③外国人がその価値に気付かず素通りする、④若い世代の間で興味・関心が低い、⑤市の窓口が多岐にわたっている。

● 市担当課の考え

上記の課題を解決することは、歴史・文化を活かした観光を促進するうえでも必要なことであり、また、セントラルパーク構想や福岡城跡整備計画等の施策にとっても、有益であると考えられる。

史蹟の標識を「建物」「人」「生活」の見える標識にしたい
イギリスの例：壁しかないのに解りやすく、親しみやすい図が現地にある



(2) 事業目的

福岡市が経済・産業・政治だけでなく、観光においても九州・アジアの中心として発展していくために、他の追従を許さない大型史蹟福岡城・鴻臚館を活かした観光都市戦略、ランドマークづくりによって「世界No. 1のおもてなし都市・福岡」の実現に資する。

(3) 事業目標

① 市民協力・市民目線によって市民が誇りうるランドマークをつくる

市民協力・市民目線によって市民が誇りうるランドマークをつくることにより、「連れて行くところがない」を返上する。

② 国際観光客が感激する観光地としての魅力アップを行う

国際観光客が感激する案内標識モデルチェンジ、イベント開催やガイドのスキルアップを行い、素通りする外国人を引き留める。日本人も見直す（黒船効果）。

③ 若者・次世代が主役で郷土歴史遺産を学び、伝承する習慣をつくる

若者・次世代が主役で郷土歴史遺産を学び、伝承する習慣をつくる。「こんなすごいものを知らなかった」では済まされないようにする。

(4) 事業内容

① 市民協力・市民目線によって市民が誇りうるランドマークをつくる

- a) 「市民フォーラム」を開催し、市民の啓蒙や参加型の場をつくる。第1回市民フォーラムは「福岡城・鴻臚館史跡公園の新しい息吹」と題して、奈良大学学長千田嘉博氏の講演や史跡公園の未来討論をおこなった。9月5日13:30～16:30、福岡市役所15階講堂。参加者224名。第2回は1月30日開催予定で、各事業取り組みの発表等、新鮮な内容にする。
- b) 各種行事に際し「福岡城整備基金」への協力を行う。福岡商工会議所とのタイアップ等、団体や市民への協力働きかけをおこなう。
- c) 市民目線の案内標識を作画し、現地への建植等の活用を考える。「建物」「人」「生活」の見えるリアルな画を福岡市文化財部時代考証のもと作成。福岡城4枚、鴻臚館2枚作成し、公開展示（8月5日～9月25日、福岡城むかし探訪館・三の丸スクエア）・意見収集を行った。4か国語の解説モデルも作成した。



市民フォーラム9月5日実施



リアルな案内標識
作画
室川康男

- d) ガイドのスキルアップ。テーマ性のある「ストーリー・ガイド」を始めた。福岡城内の「食」「戦備」「行政」「水」をテーマに、研究・発表会（6月30日）、8月1日より毎週土曜日13:30～15:30ガイドを開始した。参加者8月24日まで27名。



② 国際観光客が感激する観光地としての魅力アップを行う

- a) 国際観光客参加の福岡城イベント Attack the Fukuoka Castle 開催。英語使用、関門でゲーム「城攻め」。8月9日16:20～18:00開催、福岡城内。参加83名（内外国人59名）。



英語のゲームで「城攻め」イベント
8月9日実施

- b) コンベンションタイアップ。福岡市内開催コンベンション等に歴史解説等のアトラクション懇話のPRを検討中。

③ 若者・次世代が主役で郷土歴史遺産を学び、伝承する習慣をつくる

- a) 福岡城クリーンアップ作戦。まちづくりに繋がる周辺市民参加の清掃活動。6月7日（日）9:00～10:00「ラブアース」運動とも連携。参加者約150名。年内あと1回開催準備中。



福岡城クリーンアップ作戦
6月7日実施

- b) 西南学院大学との連携。同大学「歴史探究会」とのタイアップを検討する。

- c) 九州産業大学との連携。教授指導・学生参加型の福岡城内アイデア型イベント準備中。現地視察（8月27日、16名）を経て検討し、9月16日18:00学生提案公開発表会を予定。

d) 九州大学との連携。教授指導、学生参加のVR・AR手法による「鴻臚館対話型コンテンツ開発」「モバイルアプリ開発実践講義の現地（鴻臚館）公開デモ」を推進中。第2回市民フォーラムにも発表する。



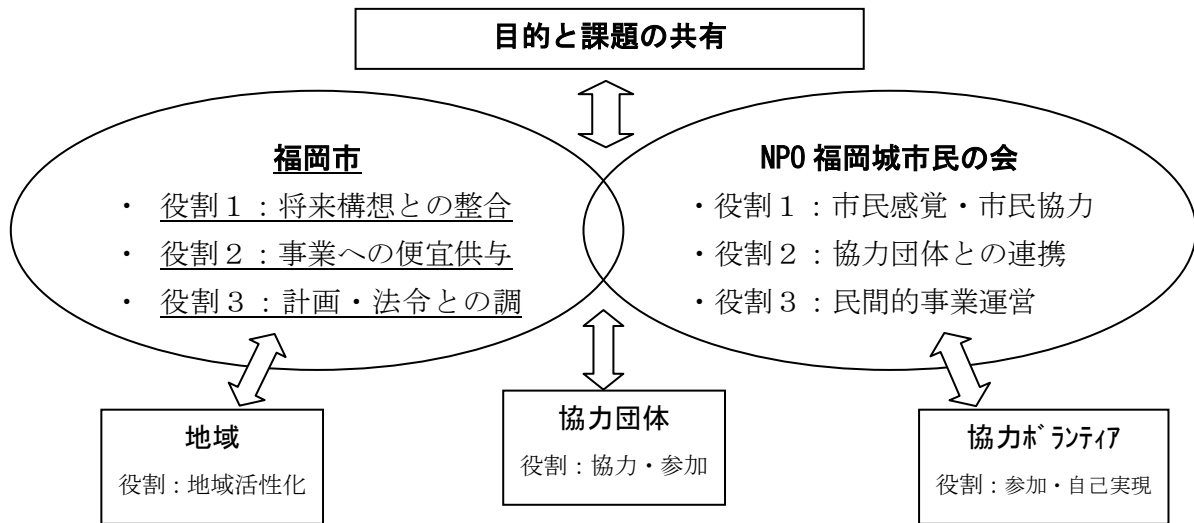
九州大学AR
打合せ
9月8日実施

e) 市内中学校で小冊子「1300年前の高速道路」を活用して、鴻臚館・古代官道の講義・現地見学を行うべく準備中。舞鶴、野間、板付中1年生、500名、10月～11月開催。福岡市教育委員会と連携。



小冊子「1300年前の高速道路」

(5) NPOと市の役割分担



(6) 共働事業のメリット・成果

- 単独ではできにくい事業が双方即決で出来る。
4月1日活動・予算執行開始が可能で、「スピーディ」かつ「確実」な事業ができる。11事業中、5件が上期計画完了・下期も実施、4事業が下期実施で準備順調、2事業が下期検討。
- 実施事業の効果 上期計画完了の5事業
 - a) 市民フォーラム：講師・行政・NPO・市民一体の討論など大変熱心な会合になり、大好評であった。国内外の活用例も紹介され千年の共存する福岡城・鴻臚館活用に新鮮な示唆が得られた。若者やビジネスマンの参加もあった。今後の広がりが期待される。
 - b) 市民目線案内標識：室川画伯の画は文化財部の時代考証・資料提供もあり、市民目線がかつ質の高いものができた。案内標識に活用以外に、ガイドのツールや九大のARプロジェクトとのドッキングなど、色々な活用が提唱されている。
 - c) ストーリー・ガイド：初めての取り組みだが、好評。テーマに沿った遺跡の開示など行政の協力。ガイド自身に自発的な勉強をする習慣ができた。今後、PRが課題。
 - d) 英語イベント：「城攻略者」はいなかったが、“Try Next Time”と「楽しかった」「また参加したい」の声。英語系の外人・日本人ともに文化・歴史に関心があり史跡の発信に期待高まる。三人組方式（外人+日本人）が思わぬ国際交流になった。PRの改善などの知恵がえられた。
 - e) クリーンアップ作戦：爽やかな早朝イベントで好評。市幹部・職員、市民、企業社員等幅広い参加。若者も多く、ファミリーもいる。福岡城・鴻臚館を美しく、大切に作る意識に繋がる。

(7) 共働するうえで苦勞した点・工夫した点

- 「スピーディ」でかつ「確実に」成果を上げるための工夫

隔月の定例会の外に、毎月の「企画分科会」（委員長・副委員長・四部局係長・NPO）での方向付けと、七つのワーキンググループ（WG）を設けたのが成功のコツ。

- 問題点をどのようにして克服してきたか

事業ごとに「事業推進シート」をつくり進行管理を行った。ひとつの課題はプロジェクト（WG主体）のプロモーターの確保。

(8) 担当者の声・市民の声

- 担当者の声

企画分科会、WGが生き生きとして物事を推進していく習慣に、担当者・関係者の意識が高まっている。

- 市民の声

どの事業も一般参加者の声は好評で、期待感が寄せられていることを感じている。市民フォーラム始め、各行事のアンケートはとりまとめ中。

(9) 28年度への展開

- 28年度以降への継続

三つの事業目的は単年度では大きな成果を上げにくく、初年度経験で改善するものもある（外国人プロジェクト等）。

テーマ間の相互コラボ（英語系+韓国語系+WiFi等）やバージョンアップがあり、ネットワークとしての広がりが今後期待される。

- 共働事業継続の必要性

- ・新発想・新規のものも多く行政との共働は不可避なものが多い（市民目線標識等）
- ・行政との共働実施でないと円滑に運ばないものが多い（史跡関連・公共施設等）
- ・官民共働的プロジェクトが多い（大学・学校等、教育委員会や多くのステークホルダーの協力）

これらのことから、28年度以降もNPOと行政とが「共働事業」として事業を実施する必要性がある。

- 28年度の事業計画について

- ・基本的には提案時の3か年展望と具体計画を初年度経験で修正して取り組みたい。
- ・大学の積極的取組があれば、予算規模の増額をお願いしたい。